「甘酒」

わたなべしずか　（30 代）

家族が増えるとき、私は慄いた。

夫に「籍を入れよう」と言われたとき、それが最良の選択なのかわからなかった。夫婦だ、家族だといわれてもピンとこないし、書類一つでなにか変わるものかと首をかしげていた。

妊娠している。その結果に私は台所で崩れ落ちた。

夫の用意してくれた晩酌がうらめしかった。

みんながみんな大変だと口をそろえて言う子育てを私ができるとは到底思えない。これからやってくる変化が怖かった。想像すればするほど、怖くなる。突然地面が抜け落ちて底のない闇に落ちていくようだった。

生まれてきたのは男の子だった。

息子は元気で、もうすぐ２歳になる。母親となった。妊娠中から、ママ、お母さんと呼ばれるのに違和感があって居心地が悪い。いまだにしっくりこない。

息子は世界からの大きな預かり物で、たまたま担当者となった私だが、お母さんやママという人ではない。私なんかをそう呼ばないで、お母さんはもっとすごい人のことだから。「我が子」「私の家族」というような、一心同体みたいなキツイくくられ方も落ち着かない。そんな風に思えて、息子のことをよく言えば一人の人として独立してみていて、悪く言うと埋めがたい距離をとって遠く対岸からながめている。そういった感じだ。

先日、夫が「赤ちゃんも飲める甘酒」を買ってきた。甘酒は栄養があるらしいから、息子に飲ませようというのだ。

「えー、飲むかなぁ？私、甘酒って苦手。」

「俺も。なんなら苦手っていうより嫌い。でも、彼は好きかもしれないし、何事も経験だよ。」

いつも牛乳を飲んでいるコップに入れて、息子の前に出してみた。最初は手でコップをかき混ぜる。夫がコップをもって「ちょっと頂戴。んー！おいしい！」と飲んで見せる。

夫を見て私は、『あ、本当は飲んでないじゃん！嫌いだもんね。』と心の中でツッコんだ。

すると夫の様子をみて息子も決心したのか、口をつけた。

口に入れると、目をぎゅっとつむって、舌をべーっと出した。私たちは笑いながら、「あー、おいしくなかった？」と聞くと、彼は果敢にもう一口もう一口と飲んでいった。そのたびに、顔をくしゃっとさせている。

初めての味と食感に驚きつつ、でもつい飲んでしまう。という感じか。三口ほど飲んだところで手が止まり、初めての甘酒はおしまいになった。

私と夫は笑いながら、

「おいしくなかったかー。やっぱり、甘酒って好きじゃないという、我が家はそういう意見でまとまったね。」

あ、家族っぽいなと、胸に浮かんだ。

好きなものではなくて、嫌いなもの苦手なものが一緒。そういうのもありだと思った。

甘酒がきらい、苦手。そのことが私と夫と息子の共通項となって、ゆるやかにふんわりとむすんでくれている気がした。

抱き合う三人を、柔らかいタオルのようなもので包んで、その上からリボンをふんわりとかけるイメージだ。ゆるくて、いつでも出入り自由。

息子がその高い声で、「フワフワ」と言って笑っている。